

第77回二松学舎大学人文学会大会講演題目・研究発表要旨

日時 平成十年七月四日(土)
場所 千代田校舎二〇六教室
三〇六教室

講演

実学と誠の再発見

——朝鮮実学と21世紀を介して——

東京大学教養学部教授 小川 晴久 先生

研究発表

《国文学》

『十六夜日記』題名考

博士前期課程 二年 下 浅 千穂

一体、古典は書写され、伝えられてきた諸本によって、読むことができる。現在私たちは、『十六夜日記』を文学作品として呼んでいるわけであるが、作品に対する評価や解釈は一応定着されてきているものの、書写される過程に於いて、はたして『十六夜日記』はどのように受け取られてきたのであろうか。この点について、諸本に付けられた題名の違いから考え直してみたい。

例えば、永青文庫本では『いさよひの日記』、九条家本では『阿佛

記』、静嘉堂文庫本では『阿仏房紀行』、などとなっている。これらを見ると、この作品の題名は作者阿佛自身が付けたものではない、ということがわかる。これは、書写者の読みのあらわれではないであろうか。細川幽斎はどう読んだのか。池田光政はどう読んだのか。様々な題名が付けられている。

ではなぜ、『十六夜日記』に定着したのであろうか。作者内容から、『十六夜日記』と読み取ったのは、一体どういった所を問題としたのか。このような事について、考察してゆきたい。

「好色五人女」巻五の特異性

博士後期課程 一年 岡 田 純 枝

「好色五人女」巻五「戀の山源五兵衛物語」は他の四巻同様、実際に起こった事件をモデルにして書かれたものである。しかし。その内容は非現実的で他の四巻とかなり様相を異にしている。巻五については、これまでも男色が全面に描かれていること、結末が悲劇的でないことなどからは、他の四巻との相違が述べられていた。しかし、それらについては、巻四の五で吉三郎の兄分が登場することに

より、巻四から男色は描かれており、また、「五人女」という物語を連句の一卷に見立て、揚句をめでたく詠む形式を踏襲し、巻五の結末もめでたいものとしたという説明がなされており、巻五の特異性を明確にするものではない。そこで、「五人女」に見られる女性の共同体意識、巻五のみに見られる怪異性の二方面から、「五人女」巻五の特異性について考察していきたい。

種田山頭火の「銃後」二五句について

博士前期課程 二年 及 川 和 憲

種田山頭火には、経本仕立ての小句集が七冊とこれらを一本化した若干の手を加えて昭和一五年四月に刊行された句集『草木塔』がある。『草木塔』は山頭火自身の意志によって残された集大成的な句集（一代句集）であり、山頭火俳句を研究する上で、非常に重要な句集といえる。

句集『草木塔』七〇一句は、一一の見出しが付された句群からなり、それらの中で「銃後」という見出しの付されている二五句は、句数的には最小の句群である。しかし、その内容は戦争とも関わり、句集中でも多くの問題を含んでいるといえる。

本発表は、同時代の俳壇において戦争を詠んだ句（「戦火想望俳句」などと呼ばれている句）との比較などを行うことにより、「銃後」二五句の特質についての考察を試みようとするものである。

橘逸勢の書風

羽田高校講師 中 川 聡

三筆の一人で知られる橘逸勢には、確実な真跡が残っていない。そこで、その書風について資料が注目される。

『江談抄』には、逸勢の書いた安衛門の額が「安嘉門の額は髪逆さまに生へたる童の靴沓を着たる体」で、往来の人々をたびたび蹴るといういたずらをしたが、額の中央を消すことによってそれがおさまった、という説話を載せている。

ここで、注目されるのが、「髪逆さまに生へたる童の靴沓を着たる体」とは何を意味するかである。春名好重氏は、これを逸勢の書風を表すものとみて、「逸勢の書は筆力が強くて筆勢が鋭かったことと考えられる」という。

しかし、現代人の書への見方と、平安時代の人々の見方では、観点が違うことは想像に難くない。「髪逆さまに生へたる童の靴沓を着たる体なり」という、妙に具体的な記述的な記述は、果たして逸勢の書風を表現しているものなのか、また、なぜ扁額の文字の中央を消したら童子がいたずらしなくなったかなど、書風と解したのでは理解できない疑問が残る。

そこで、まず『江談抄』の記述から、逸勢の書風を見ることは可能か、ということについて論じ、扁額の書が、どのような意味を持っていたかということについて論じてみる。